

水と緑と笑顔あふれる北海道のアメニティ・タウン 若者世代に人気の子育てしやすいコンパクトなまち

北海道開拓とともに育まれた 砂川市の基盤

北海道の中央部(道央)、道内2大都市とされる札幌市と旭川市のほぼ中間点(札幌からJR特急で46分、旭川から同38分)に位置する砂川市は、今年(令和4/2022年)7月1日で市制施行(昭和33/1958年7月1日)から満64年。翌7月2日からは市制施行65年目を迎える。

砂川市をはじめとする空知地方(現在10市14町)は、周知のように明治時代初期、日本最大の炭田とされる石狩炭田(地質構造の違いから、北部は空知炭田、南部は夕張炭田に分類)の発見によって開拓が始まった。

特に明治19(1886)年、石炭を運ぶために岩見沢と旭川を結ぶ中央横断道路(現国道12号/札幌市〜旭川市の前身)の一部が、このエリアに完成したことで開拓は加速する。

明治23(1890)年1月には、まず道路沿いに旧滝川村(現滝川市)が開村。同年9月には滝川村から現砂川市を含む旧奈江村(現砂川市、歌志内市、芦別市、赤平市、上砂川町、奈井江町)が分離・開村した。

さらに、歌志内炭鉱の石炭を運び出すための鉄道(※小樽方面から札幌経由で岩見沢まで来ていた旧北海道炭礦鉄道幌内線が、岩見沢〜砂川まで延伸/現函館本線の一部)が、翌明治24(1891)年に開通したのを機に、現砂川駅が開設された。原生林に覆われていた砂川周辺の地は、この道路と鉄道の開通によって、砂川駅周辺の市街地化が始まり、急速にも集まるようになった。

旧奈江村はその後、旧歌志内村(現歌志内市、芦別市、赤平市)を明治30(1897)年に分村させ、明治33(1900)年には旧砂川村と改称。大正12(1923)年に旧砂川町へ町制施行後、昭和19(1944)年に旧奈井江村(現奈井江町)が分離、昭和24(1949)年

よしおか まさみ
善岡雅文
砂川市長



に現上砂川町が分離。旧砂川町は9年後の昭和33年に市制施行を果たす。

人口は昭和33年3月の市制施行直前の段階で3万1249人、新十津川町の一部を加えた翌昭和34(1959)年には3万2495人に増えたが、それをピークに昭和35(1960)年以降、減少が始まり、現在に至る(本年4月1日時点の人口は1万6011人)。

その背景には、空知地方でも進みつつあった旧炭鉱の整理と新炭鉱への移行と同時に、



おとぎの国のお城のようなデザインが好評なバンケ歌志内川の水門



砂川駅前を盛り上げる青年会議所主催の「すながわ駅前元気もりもりプロジェクト」

の石炭を活用した工業立地（東洋高圧／現北海道三井化学など）もどンドン進みました。発展のための要素が、複合的な形で存在していたわけでは、炭鉱景気の衰退以後、現在は周辺の市町村を含め、砂川市も大幅な人口減少に見舞われています。全国の都市と同様に、この人口減少は今後も避けることのできない潮流と言えます。しかし、例えば北海道縦



伝統の馬具専門店「ソメスサドル」の皮革製品はふるさと納税の返礼品としても大人気

それはそれとして、砂川市の前身・旧奈江村が旧滝川村から分離した明治23年当時の人口はわずか11人とされている。例えば、それからの数十年間で、現在の4市2町（砂川市、歌志内市、芦別市、赤平市、上砂川町、奈井江町）に枝分かれしていくまでに、開拓およびまちづくりが拡大していったのだ。当時の炭鉱景気の急激な上昇、炭鉱町の未曾有の発展ぶりに

は、改めて驚かされる。

さらに旧奈江村を構成していた現在の4市2町に、奈江村の基盤だった旧滝川村の滝川市および現新十津川町、浦臼町、雨竜町を合わせた石狩川両岸の5市5町は、空知地方の中央部で《中空知広域圏》を形成（総面積約2161km²）。炭鉱景気で結ばれた明治時代以来の圏域関係を、現在も緊密に保持している。「道内に数ある炭鉱地帯の中でも、中空知地域の発展が急だった要因は、良質な炭鉱群の存在そのものや、道路・鉄道の敷設だけにあるわけではありません。例えば砂川は、石狩川と空知川（石狩川の支流）の合流地点にあるため、木材運搬や砂利採取などの事業も盛んに行われるようになりました。同時に豊かな水環境を活用した大規模水田開発、近隣炭鉱



貫自動車道（※函館市〜札幌市〜旭川市〜稚内市／一部道央自動車道／砂川市には砂川SAスマートICがある）が、もともと利便性の高い国道12号およびJR函館本線（※函館〜札幌〜旭川）と共に市域を横断しているなど、砂川市の道内における交通の要衝としてのポテンシャルは健在です。そうした交通環境の良さは、高度な医療環境、日本一を誇る市民1人当たりの都市公園面積（※約212ha）、豊かな自然環境などと共に、人口減少の流れを可能な限り抑制する力（魅力）になるはず。同時に市民の皆さまや、これから砂川市への移住を検討してく

世界的な規模で始まっていた石炭から石油への根幹的なエネルギー転換の潮流など、さまざまな要因が介在していた。



防災拠点としての優れた機能を備えた砂川市新市庁舎



圏域の厚い信頼を集める地域センター病院・砂川市立病院

ださる方たちが、実際に砂川市で心豊かに暮らしていくのに不可欠な、大きな地域資源の一つになるものと考えております」

そう語るのは、善岡雅文砂川市長だ。旧砂川町生まれの善岡市長は、高校まで地元で過ごし、大学進学でいったん地元を離れるものの、卒業後の昭和49（1974）年に帰郷して砂川市に入庁。36年間にわたる勤務の後、平成23（2011）年4月の市長選挙に出馬し、初当選。現在に至っている（3期12年目）。

人口減少は確かに、北海道の旧炭鉱地区において突出した形で進んでいる。しかし、善岡市長の言葉にもあるように、これは全国的な潮流の一環でもあり、そういう意味合いにおいて中空知地方は、むしろ人口減少の課題を先取りしてきた課題先進地帯とも言える。

そのただ中であって、人口減少時代を前提に市民

が愛着を持てるまちづくりを目指す砂川市の在り方には、これからご紹介していくように、日本社会が人口減少時代を心豊かに生きていく上での、さまざまな示唆に富んでいるように思われる。

圏域の信頼を集める市立病院と防災拠点・市役所本庁舎

砂川市を訪れたのは、ゴールデンウィークを目前にした今年の4月26日。道南地方に上陸しつつあった桜前線が砂川市に届くのは、その数日後（5月1日前後）のことだった。

朝の通勤通学電車が出発した直後、午前8時過ぎの砂川駅前は一見閑散としていた。しかし、市役所に向かいほんの数分も歩くと、思いがけない数の人波に出会った。

中空知地域の基幹病院として、周辺エリアの信頼を一身に集める《砂川市立病院》に向かう車と人が四方八方から現れ、病院の正面玄関前には、診療開始を待つ人々の長い列が既に出来上がっていたのだ。

「砂川市立病院（※昭和61年度「第1回自治体立優良病院表彰」受賞）は砂川市の現在のまちづくりにおいて、中心軸を成す存在と言えます。現在の市役所庁舎は昨年5月6日にオープンしたばかりですが、以前は砂川市立病院に隣接していました。

砂川市立病院は中空知二次医療圏の地域センター病院として、また第2種感染症指定医



石狩川の水量を調節する砂川遊水地はウォーターレジャーの中心地「砂川オアシスパーク」としても機能

療機関、地域救命救急センター、地域周産期母子医療センター、地域がん診療連携拠点病院にも指定されるなど、多角的な機能を備えています（※診療科28科、総病床数498、職員数1023人、その内106人が医師）。

中空知地域（5市5町）の圏域人口は現在約10万人ですが、患者さんは空知地方全域（10市14町）から来ていることが分かっています。特にここ2年ほどは、第2種感染症指定医療機関ということもあり、新型コロナウイルスの患者受け入れ、ワクチン接種の実施などで大変多忙な時期を過ごしています。しかし、地域センター病院としての役割は年ごとに増しているのが、施設も拡張に次ぐ拡張を行っているのが

砂川市

(北海道)

市 政 ル ポ



北海道縦貫自動車道の利用者でいつもにぎわう砂川ハイウェイオアシス館



子どもたちの歓声が四季折々に絶えない北海道立「北海道子どもの国」

現状です。市役所の移転については『市立病院のそばに』という多くの市民のご要望もあり、従来の場所からは100mも離れていない現在地に決めました」(善岡市長)

明治時代に砂川市の最初の市街地化の基盤となったのは、現砂川駅の西側で、国道12号沿いを中心に、今も砂川市では大きな商店街が形成されている。しかし、人口減少の進行な

どとともに、商店街のにぎわいも減少しつつあることから、砂川市では《砂川駅前地区整備基本計画》(詳細は後述)を発表している。

砂川市立病院へは前述のように、JR砂川駅から国道12号を渡り、まっすぐの道を5分も歩くと到着する。そこから2分ほど歩けば砂川市の新市庁舎だ。

市役所庁舎の上階からは石狩川が遠望できる。さらに眼下には、石狩川の洪水抑制に大きな機能を果たす砂川遊水地(砂川オアシスパーク)が見渡せる。

明治時代から大正・昭和初期までの砂川市の発展の要因の一つ、石狩川と空知川の合流地点にまちが形成されたという地理的環境は、交通の要衝としての水運を活用できた反面、水害の多い土地柄を形成する要因ともなった。そのため、治水事業は歴代の課題だった。

その課題が大きく緩和された要因は、昭和45(1970)年に完成した新水路や、平成10(1998)年に完成した支流の河川トンネルのほか、昭和62(1987)年に着工し、平成7(1995)年に竣工した砂川遊水地(面積1.8km²、周囲3.8km、計画洪水調節容量1050万m³)などの存在にある。

「市役所が現在建っている場所は、ハザードマップを見ると一目瞭然ですが、従来は石狩川(※市役所周辺では複数の支流が石狩川に流入している)が洪水を起こせば、最も影響を受ける場所でもありました。さまざまな



アジサイの花が咲く石狩川流域は観光交流の場としても得難い地域資源(砂川オアシスパーク周辺)

河川工事(河川トンネルなど)や砂川遊水地の水位調節機能により、下流域も含め、洪水の危険性ははるかに低下しています。

しかしそのような場所に、非常事態の際には防災拠点となるべき市役所本庁舎を建てるということとは、逆に非常にシビアなこととであり、建物の構造や機能にも、防災面でのさまざまな工夫を凝らしています」(善岡市長)

新市庁舎は鉄骨造(耐震構造)の地上4階地下1階、延床面積は約5932m²(建築面積約1842m²)に達する。防災拠点としての機能面では、「1階」と「2階以上」の電気や通信の設備系統を分けることで、浸水時にも最低限の庁舎機能を維持できるようにしている。また、地中熱を利用した冷暖房システムや空調換気の自動制御、真空ガラス採用によ



幼児から高齢者までが積極参加する「花いっぱい運動」



砂川市に本格的な春の訪れを告げる恒例「すながわ緑と花の祭典」(砂川北光公園)

代と50年代には大規模な水害が何度も発生しました。しかし、大規模な河川改修や、先ほども申し上げた砂川遊水地の完成で水害は激減しています。砂川遊水地は大雨が降った際などに石狩川の水を一時貯留することで、石狩川の水位を下げる役割を果たしていますが、普段は多彩なウォーターレジャーを楽しめる名所としても人気が高く、防災面の役割とともに、観光交流面においても貴重な地域資源になっているのです(善岡市長)

人口減少時代を 心豊かに暮らすためのまちづくり

砂川市の面積は、広大な面積を誇る自治体の多い北海道内35市のうち34位に当たる78・68km²。北海道ではコンパクトシティとも言える。半面、河川の流域面積や山林部分が多いこともあり、主要なにぎわい創出の場は砂川駅を中心とする比較的平坦なエリアに集中している。それもまた、暮らしやすさの一つの要因と言えるだろう。

例えば、電線地中化が進む国道12号沿いには《すながわスイートロード》がある。空知地方が炭鉱景気で栄えていた時代に次々出店されていった「疲れを癒やす甘いお菓子の店」が原点となり、現在では菓子店やカフェが約20店舗、点在している。砂川市立病院に勤務する女性職員や同附属看護専門学校に通う女子学生などを中心に、砂川市は、実は空知地方



スイートロードの菓子店などが参加する「すながわスイーツフェスタ」(地域交流センターゆう)

で若い女性の多いまちとしても知られている。《すながわスイートロード》は観光客だけでなく、そうした砂川市に暮らす若い女性を中心に、老若男女の人気を集めている。

また、北海道縦貫自動車道の砂川SAには、砂川市の特産品を販売する店や人気飲食店、子ども向けの遊具広場などがそろった砂川ハイウェイオアシス館がある。

砂川ハイウェイオアシス館は、昭和48(1973)年に誘致された北海道立《北海道子どもの国》とも直結している。《北海道子どもの国》は市民の熱心な運動が実を結んでの誘致となったが、それは砂川市における市民協働のまちづくりの契機ともなり、昭和49年の「緑化都市宣言」につながった。さらにその実績を基盤に、昭和59(1984)年に当時の

る高断熱化、照明の自動制御、ビル・エネルギー管理システムによるエネルギー管理の採用で二酸化炭素の4割削減、それに伴う光熱費の4割削減などを図っている。

その他、災害時緊急排水槽や防水扉などもより高度に備えられ、災害対策本部の機能強化、通信手段の多重化による安全対策など、特に水害に対する防災拠点としての陣容は非常に充実している。

また、市民に対してはハザードマップを随時更新して注意を喚起、地図情報システムや高齢者見守り用の支援情報などと連動して、災害弱者の情報を常に最新の状態に把握するなど、日常的な準備も怠りない。

「砂川市の歴史は、まさに水害の歴史と言っても過言ではありません。特に昭和30年

砂川市

(北海道)

市 政 ル ポ



砂川駅の東側と西側をつなぐ自由通路は「地域交流センターゆう」とも直結

環境庁から北海道で唯一（全国で

は20カ所）の《アメニティ・タウン（快適環境都市）》のモデル地区に指定された。前出の善岡市長の発言にもあつた通り、砂川市は市民1人当たりの都市公園面積日本一を誇っているが、それはこうした緑化都市宣言からアメニティ・タウンのモデル指定などを通して培われた、市民協働の精神で創り上げた地域資源なのだ。

「砂川市では現在、鉄道利用の減少で市街地の空洞化が目立つ砂川駅前地区の整備計画を進めています。」

砂川駅の東側には500席の大ホールも備えた多目的交流施設《地域交流センターゆう》があり、市民文化の発信基地としての役割を果たしています。

国道12号や市立病院、市役所などのある西側とは自由通路で結ばれていますが、西側駅前の商店街の活性化とともに、東側と西側が一体的にぎわうようなまちづくりをしたいというのが、かねてよりの悲願でした（善岡市長）

本年度は実施設計の段階で、計画の完遂までにはしばらく時間がかかるが、《地域交流センターゆう》と対になるような、「市民や事業者などが自由に交流できる、フリースペースや多目的室が中心となる交流施設」善岡市

長）が建設される予定だ。

砂川市の公共施設の建設事業には、こうした市民の使い勝手の良さを第一とする姿勢が目立つ。この施設ができれば、実際、駅の西側に立地する砂川市立病院や市役所新庁舎、さらに国道12号沿いのスイートロードや砂川オアシスパークなどと、東側の地域交流センターゆう、北海道縦貫自動車道の砂川ハイウェイオアシス館、北海道子ども国などにぎわい創出施設とが有機的に、面的に結ばれることになる。市民や来訪者の利便性はより高まるだろう。

「外部からの企業や子育て世代の誘致は確かに必要で、例えば砂川発の地域ブランドを全国発信するオアリパ事業（※OASIS REPUBLIC—SUNAGAWABASEの略）のほか、手厚い子育て支援や教育支援などを整えるとともに、その情報発信も積極的に実施しております。」

しかし、その一方で、より以上に図るべきは、まず地元企業の振興であり、最も大事なものは地元で現在暮らしている、あらゆる世代の人々の幸せと笑顔だと考えております（善



砂川市の地域ブランド（いいモノ、いいトコロ）を発信するシティプロモーション「オアリパ」

岡市長）

砂川市の人口ビジョンの目標は「2060年の人口1万人維持」と控えめだが、そうした市民の幸福を最優先する姿勢は、砂川市を訪れる観光交流者や移住希望者にも、非常に魅力的に映るだろう。

人口減少時代を前提に、だからこそ、いたずらな数値的目標にとられ過ぎず、市民や地域産業の笑顔を何よりも大切に進められる砂川市のまちづくりは、おおらかな魅力に満ちている。

（取材・文：遠藤隆／取材日：令和4年4月26日）



市長も参加、子育て世代に大好評の「子育て懇談会」